

まえがき

本書は、ペシャワール会の過去六年の活動を報告したものである。これまで、ほぼ五年間ごとに記録をまとめて執筆してきたが、本書は過去二十四年の現地活動のうち、二〇〇一年九月から二〇〇七年四月現在までを取り扱っている。「九・一一同時多発テロ事件」からまる六年半に相当する。この間、公私共に激変と言うのがふさわしく、様々な出来事に巻き込まれながら活動を継続してきた。だが、規模と深さにおいて、どの時期よりも大きく多彩で、どこまでを記述するか苦労した。

これまでの報告とやや異なるのは、二〇〇〇年夏からアフガニスタンを襲った大旱魃以後、医療を並行して「水対策Ⅱ農業復興」が大きく比重を占めたことである。飢餓と渇水を前に医療は余りに無力で、辛い思いをする。清潔な飲料水と十分な農業生産があれば、病の多くは防ぎ得るものであった。私たちは、「百の診療所よりも一本の用水路」を合言葉に、体当たりで事業を邁進してきた。

この水源事業を通して、自然と人間との関わりが大きなテーマとなった。特に、二〇〇三年三月に用水路建設事業を始めてからは、そうであった。ほぼ全ての時間を現地で費やし、他のことを顧みる暇がなかった。この四年間は洪水、土砂流、集中豪雨、すべりなど、あらゆる自然災害との戦いに明け暮れた。自然はヒトの都合を待ってくれないので、こちらがそれに適合して動かねばならなかった。

これまで、漠然と、「自然Ⅱ環境問題」を考えたことはあったが、これほど劇的な形で矢面に立たされるとは、思ってもいなかった。しかも、インダス河支流の規模は予想を超える大きさで、「河川」とつき合うのが決してのどかなものでないことを思い知った。しかし、この用水路建設事業によって、自然と人間、人間と人間の関係について、より深く気づくものがあったと感じて



いる。それをどこまで正確に伝え得るかは心もとないが、平和とは決して人間同士だけの問題でなく、自然との関わり方に深く依拠していることは確かである。この記録から、少しでもそれを嗅ぎとって頂ければ、本書の目的を達せられる。また、自然環境や河川の問題と取り組んでいる方々には、一つの参考事例としていただき、ずぶの素人なるが故の認識不足をご指摘くだされば幸いである。

二〇〇七年六月現在、アフガニスタン復興は未だ途上であり、戦火は泥沼の様相を呈している。米穀を同盟軍の兵力は四万人を超え、初期の三倍以上に膨れ上がっている。欧米の識者も、いったいテロリスト捜しにこれほどの浪費と人命の犠牲が必要だったのかと疑問を投げかけている。米穀に擁立された他ならぬカルザイ政権自体が「三〇〇億ドルの軍事費が復興に使われていたらもっと復興が進んだだろう」と、批判的な意見を公然と述べたと言われる。

内外がきな臭い風潮となり、人為の驕慢と錯覚に報いるかのごとく天変地異が世界で頻発する。呑気に「人類の進歩発展」を謳歌する時代は終わった。アフガニスタンでの体験は、この印象を強烈に裏づける。いったい、私たちはどこに向かおうとしているのか、どうすればよいのか、誰も確たる答を主張できないまま、流されてゆく。

だが他方で、時流から距離を置き、より良い世界を真剣に模索する心ある人々も、あらゆる分野にいる。私たちが持たなくてよいものは何か、人として最後まで失ってはならぬものは何か、私たちのささやかな実践が、それに想いをいたす機縁となれば、苦勞も報われると思っている。武力とカネが人間を支配する時代にあって、私たちの軌跡そのものが、平和を求める人々に勇気と慰めを与えればこれに過ぎる喜びはない。

